
Angel Beats! Pararell?

小心者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AngelBeats!Pararell?

【Nコード】

N3168N

【作者名】

小心者

【あらすじ】

とある日、少年は突然死をむかえ、死後の世界でSSSと天使の戦いに巻き込まれていく……。

前書きのようなもの

前書き

どうもこんにちは、小心者と申します。いまさらですが、初投稿でいきなり、

Angel Beats!の二次創作をしてみました。すべてアニメを見終わったので

、そろそろ書こうかな、という気がしてましたが、まだ、Yuki in Novel

でデジタルノベル版を書いている最中で、（もちろん、AB!の二次創作です。）

平行しながら書いているので、更新が遅いかもかもしれませんが、文章が下手かもしれません、暖かい目で見守っていただけたら、幸いです。

それでは、Angel Beats! Pararell?を楽しんでください。

では・・・。

第1話 Memories? (前書き)

それでは、第1話を投稿したいと思います。

第1話 Memories?

僕は そんな価値しかない人間なのか !

ふざけるな・・・。

ふざけるなあああああ!!!!!!

「はっ・・・!」

僕は急に目を開けた。いや、目覚めた、と言っていい。なぜなら、少し眠気が残っていたからである。初めに見えた景色は、薄暗い、夜の空だった。

ちょうど、夕方と、夜との境目の時のような、空である。僕は大字になって転がっていた。

辺りを見ようと体を起こす。そして、辺りを見回す。

見覚えのない校舎、どうやら、ここは学校のような。そして、僕が今いる場所は、

グラウンドのようだった。なぜ分かったかというと、白線のラインが大量にあったから。それだけ。でも、僕の記憶には、ない場所だった。でも・・・。

「・・・。」僕はここが、どこだか分かっている気がした。なぜだか分からないけど。

「僕・・・。僕は・・・。」その先を言うのが怖かった。でも、僕の記憶がたしかなら・・・。

「僕は 死んだのか・・・。」そのとき、フラッシュバックのように、記憶が蘇る。

僕はその日、学校に行くのがいやで、私服で街をブラブラしていた。何度か警官に声をかけられそうだったが、そのたびに、うまく巻いていた。

そして、大通りを歩いているときだった。突然冷たい痛みが脇腹に走った。一瞬何が起きたか分からなかった。横には、フードをかぶった人が一人・・・、一人、血がついたナイフを持って立っていた。誰かが騒ぐ声が聞こえた。いや、周りの人が騒ぐ声だった。なぜなら、僕が刺されたと言う事だから。急に力が抜けて、僕は道端に倒れた。

急に寒くなってきた。視界もかすんで見えなくなった。意識が消える前に聞いた最後の言葉は、「永遠に眠れ。」という言葉だった。

「ハッ！」記憶のフラッシュバックが終わって、僕はその場に座り込んだ。そう僕はその日、見知らぬ人にいきなり刺されて、死んで、ここに来た。

「・・・。ウツ・・・。」すごく泣きたくなった。突然終わりを迎えた僕の人生。短い人生はあっという間に、過ぎて、自分が何をしたいのかすら見つけられずに死んで、今、悔しいという気持ちだけが、僕を包んでいる。しばらく僕は声を上げずに泣いていた・・・。

しばらくしただろうか、僕は、泣くのを止めた。今更、終わってしまった事を考えても仕方がない。今、僕が何をすべきか考えるときだからだ。

今僕がすべきことは・・・。

「ここがどこか確かめる必要があるな・・・。」

僕はまず、校舎らしきところへ向かった。

*

「はー……。」ため息をつきながら、俺、白石みのるは、ハンドガン　　ワルサーPPKを片手に持ちながら考えていた。

理由は、十日前にさかのぼる。それは、あきら様が、富士山の泉を取って来いと言って、苦労して汲んできたあとのことだった。

あれから不幸が連続して起きるようになっていた。犬に用もないのに噛み付かれたり、追い掛け回されたり、仕事をあきら様に取られたり、拳銃の果ては、クビにされて、事務所を追い出された。

こなたたちには毎日のように笑い話にされ、俺は笑いものにされていた。そして、ある日、工事現場の近くを通りかかったとき、

突然視界が真っ暗になった。そして、気がついたら、ここにいた。

そして、ゆりさん、ゆり隊長に連れられ、ここが死後の世界で、私たちは、天使とかいう少女と戦っていると聞かされ、

半ば強制的に、SSSとかいう部隊に入れられた。そして、五日前に、また俺のように新人が入ってきた。星野って言う美少女が入ってきたのである。彼女は、自分はロボットだと言い、どうしてここに来たのか分からないとか言われ、必死にゆり隊長が

説明し、その子も部隊に入ったのである。ただ、その子もここがよく分かっていないらしく、迷子になってしまっていた。そして今、俺が星野、星野ゆめみさんを探している最中だ。探しに行く前に、ゆり隊長から、「天使に万が一遭遇したときに使いなさい。」とハンドガンを渡されてはいるが、正直心細い。早く探して帰還しないと……。ん……。？

ガサガサ……。草陰から、そんな音がして、誰かが飛び出してき

た。

「うわああああ!？」とつさにPPKを音がした方向に向けた。
そこにいたのは・・・。

「あ、白石さん、こんばんわ。」探しているゆめみさん本人だった。

「ゆ、ゆめみさんか・・・。よかった。」

「どうかしたんですか？」

「ゆり隊長がゆめみさんをさがしていましたよ。」

「そうですか・・・。でも・・・。」

「はい?どうかしたんですか？」

「でも、さっきゆりっぺさんから渡された銃を落としてしまって・・・。」

「え!？」まずい。今は俺のハンドガンしか装備がないことになる。
こんな状態で天使なんかに出会った日には・・・。

「と、とりあえず戻りましょう!」そう言ったときだった。目の前に、見てはいけないものがひとつ。

「・・・!」そう、あの天使だった。

「う、うわああああ!？」

俺は、ゆめみさんの手を引っ張り、その場から逃げ出したのだった。

第2話SHIELD

校舎に向かう途中、僕は妙な物を見つけた。

「ん・・・？」道端に黒光りする物が。近寄って見ると、それは・・・。

「拳銃・・・！」そう、ガンブルーのオートマチック拳銃が1丁、落ちていたのである。

「何でこんなものが？」僕がそうつぶやくと、どこからか破裂音がした。一回ではない。何度も。

「・・・？」僕は拳銃をホルスターごと拾い上げる。ご丁寧にマガジンが3個、ベルトにつけられていた。

ホルスターから拳銃を抜く。念のため、ホルスターごともって行くことにした。と、ここで僕が学生服を着ていることに気づいた。

ここに来る前は私服だったのに。まあいいや。そして、僕は、音のした方へと走った。

「うわあああああああああーーーーー！！！！」僕はそう叫びながら走っていた。前方には星野さんが、後方には天使。

俺はさつきからPPKで撃っているのだが、ことごとく弾かれる。（ハンドソニックと言っらしい）俺たちは、少しずつ追い込まれていった。そして・・・。

「なっ！」行き止まりだった。校舎の前で俺たちは、立ち止まってしまった。

「く、くそ！」やけくそで連発してみる。しかし、ことごとく弾かれ・・・。

カチツカチツ・・・。弾切れになった。くそー、ここに来てからも、

不幸ばっかしだぜ。

天使は、ゆっくり俺たちに近づいてきた。もう、終わりなのか・・・？そう思ったときだった。

バン！一発の銃声が響いた。月が辺りを照らしたとき、一人の少年が、銃を構えて立っていた。

ふう、危ない危ない。銃声がした方向に走ってみると、一人の少女が2人組みの人たちに襲いかかるうとしていた。

僕はホルスターから拳銃を抜き、マガジンに弾が入っている事を確認して、セーフティを解除した。そして、狙いを定めて、

少女に打ち込んだのである。しかし、弾はことごとく甲剣によって弾かれた。自慢じゃないが、ガスガンばかり弄っていたおかげで、射撃に関しては少し自信を持っていた。

しかし、少女は易々と弾き返した。いったいこの子は・・・？いや、そんなことを考えている暇はない。今は、この2人を助けるのが先決だ。

僕は少女に向かって連射したが、全部弾かれた。しかし、時間を稼ぐことはできた。

彼らに僕はこう言った。「早く逃げろ！」と。そして、彼らは校舎へと逃げ込み、僕もマガを使い切ってから逃げ込んだのだった。

「はあはあ・・・。」

「怖かったです・・・。」

「・・・。」

僕たちは校長室の前にいた。あれから、僕たちは、天使とやらから逃げ切り、校長室の前に座り込んでいた。

「それにしても・・・。」

「？」

「おまえ、よく天使に躊躇なく引き金を引いたな。すごいぜ……。」

「え？何で？襲われている人を助けるのは当然だけど。」

「そりゃそうだけど……。普通は拳銃なんてないからな……。あつてもあんな風に攻撃をかわしながら撃つなんてできねえよ。」

「そうですか……。」

「そうだ、お前、戦線に入らないか？」

「え？戦線って？」

「クラスSSS、通称死んだ世界戦線。さっきの少女……。天使と戦うために作られた戦線で、神に復讐するための組織なんだ。」

「そこに入れと？」

「ああ。」

「……。神に復讐するため……。か。正直、よく分からない。」

「まだ情報が少なすぎるし、それに、この人たちの情報を信じていいのかどうか……？」

「まだ、判断がつかない。」

「少し、時間をくれ。」

「え？」

「まだ、考えがまとまらない。まとまったら、又ここに来るから。1日考えさせてくれ。」

「ああ……。分かった。でも、早めに決めてくれ。」

「分かった。」

「ぼくはそう言つと、寮へ戻ることにした。（銃は返しておいた。）でも、その前にちょっと寄り道。」

武器庫

逃げる途中にこの部屋を見つけた。一瞬だからよくは見えなかったけれど、武器が大量にしまつてあつた。

僕は、窓を割り（もちろんだれもないことを確認して。）武器庫の中に入った。

そこは、あらゆる武器、弾薬、弾倉がたくさん並べてあった。僕は三つほど、銃を取り出した。

M P 5 K A 4、ワルサー P P、M 1 9 コンバットマグナムである。これだけあれば十分だろう。

僕はその武器を手に、寮に戻った。（寮の場所は校舎に行く途中で確認した。）

男子寮

僕は空き部屋を見つけると、鍵を開け、中に入った（もちろんピッキング（ry

鍵を掛け、持ってきた武器のマガジンに、弾が入っているのを確認した後、M 1 9

と P P を持ってもう一度武器庫へ行き、弾薬を運び込んだ。そして、また部屋に戻り、

追加の武器と弾薬、マガジン、今まで集めた武器をベッドの下の収納スペースに入れた。

そして、部屋に備え付けのバスルームでシャワーを浴びることにした。

僕はシャワーを浴びながら、S S S に入ろうか考えていた。しかし、考えはまとまらず、

答えを出すのは、明日にすることにした。シャワーを浴びた後、着替えてベッドで横になっている

時だった。

突然、ドアをノックする音が聞こえた。僕はハッとすると、急いで M 1 9 を取り出し、それを持ちながら、覗き穴から外を覗いた。そこには

天使が立っていた。
。

第三話 M945（前書き）

更新遅れてすいません。そしてこれからも遅れます。

第三話 M945

くそ！僕はそう言いたくなかった。目の前の扉を開ければ、天使が待っている。しかし、窓から飛び降りるわけにもいかない。ここは4階なのだ。飛び降りれば只ではすまない。

「どうする・・・。」

僕は決断を迫られた。僕は

飛び降りた。もちろん、持てるだけの武器、弾薬を持って。けどやっぱり落ちた。

ドカン！

ものすごい衝撃とともに、僕は気を失ってしまった。

・・・。

「はっ！」ここは・・・。見慣れたベットに、薬品の臭い。そう、ここは保健室だ。

だけれが、運んでくれたのだろうか・・・。そう思った矢先

「目が覚めた？」顔を上げると、他の生徒とは違う制服の少女がそこにいた。

「あ、は、はい。」

「そう、ならいいわ。唐突で悪いけど、あなた、入隊してくれないかしら。」

入隊・・・！昨日、白石って人から同じ言葉を聞いた。そうか、この人がゆりって

人かもしれない。

「迷っているなら、今日中でいいから、返事をちょうだい。」

僕の答えは

「入隊します。」

「へ？」

「昨日、白石つて人に誘われたので。彼はどこにいるのですか？」

「白石君？彼なら今食堂前でジュース買ってるわよ。それよりもなんで白石君のことを？」

「彼にSSSに入らないかと誘われたんです。ちょうど、変な甲剣を着けた人に襲われていたところを助けたときに。」

「へえ、白石君もやるじゃない、新人勧誘できたなんて。まあいいか。それよりも襲われたって？」

「甲剣を着けた少女に襲われていたんです。昨日、校庭で。」

「白石君……。あれほど天使には気をつけると言っただのに……。」

「天使？」

「あなたが言っていた甲剣を付けた少女のことよ。ここの生徒会長。」

「……。」

「まあ、詳しい話は校長室でしてあげる。今は、まあ、入隊してくれてありがとう。これからよろしく。」

ゆりさんが手を差し出す僕はその手をとった。

「あ、名前聞いてなかった。あなた、名前は？」

「宮内。」

「下は？」

「彩戸」

「宮内彩戸くんね、ようこそ、死んだ世界戦線へ！」

そういつてゆりさんは僕を校長室へ案内した。ちなみに、なぜ入隊したかというと、ここなら、僕を受け入れてくれそうだからだ。

生前の自分は、天涯孤独で、家族もない、友達と呼べるものもいなかった。だから、うそでも、集団のなかに入れることがうれしかったから。

そして、昨日、本物の銃を握ったから。

助けるためとはいえ、な。ここなら、非現実的なことが起きそう、いや、すでに起きている。

他にもたくさん理由があるけど、主な理由はこんな感じだ。

しばらく廊下を歩いていると、校長室と書かれた部屋があった。僕が入ろうとドアノブに手を伸ばす。

「待って！」ゆりさんが叫んだ。

「ここに入るには、合言葉が必要よ、あなたは新人だから、知らないけれど、そのドアに触ると、トラップが発動してあなたが吹き飛ばされるわよ。」

どうやら簡単に入れないようになっていようだ。

「これから出入りするときには、ドアの前で、神も仏も天使もなしと言いなさい。そうすればトラップは作動しないわ。」

神も仏も天使もなし・・・か。覚えておこう。

そして、ゆりさんが扉を開く。

「入rinaさい。」

僕はそのドアをくぐった。

くぐった先には 誰もいなかった。

「あれ？おかしいな、どこ行つたのかしら日向君たちは・・・。まあいいわ。とりあえず、ここに座って。」

ゆりさんは僕をソファのあるところまで誘導した。僕はだまって腰掛ける。

「で、まずは、この世界のことからね。この世界は、死んだ人間が来る世界。つまり、死後の世界よ。」

死後の世界。聞きなれた言葉だが、それでもかなりショックを受けた。そんな僕にはかまわず、ゆりさんは

説明を続ける。

「ここは、学生時代がきちんと送れなかった人たちが来るところなの。だから、自殺した人たちはこの世界には来れないの。貴方も、あまりいい思い出がないんじゃないかしら。」

たしかに、僕の学生生活は、いじめと、家族の失踪でかなり荒れていた。武器は常に持ち歩いてたし、イライラで調子を崩したこともあった。

「はい・・・。」

「そして、この世界では、模範的な行為をすると、消えてしまうの。」

「消える・・・!？」

「そう。テストで満点を取ったり、規律を守ったりすると消える。だから、私たちSSSのメンバーは、好き勝手に行動してるの。」

「あなたも、消えないように、模範的な行動はしないこと。」

「消えたら、どうなるんですか？」

「生まれ変わると思うわ。でも私はその場面を見たわけじゃないからなんともいえないけど。」

僕はとても怖くなった。何に生まれ変わるか分からない、そんな得たいの知れない恐怖が僕を包んでいた。

「安心しなさい。模範的な行為をしなければ消えないから。」

そんな僕を氣遣ったのか、ゆりさんは、そんなことを言った。

その後も、しばらく死後の世界のことについてゆりさんに聞いた。

その後。

「まあ、こんなところね。天使の事に関しては、白石くんに聞きなさい。彼は、SSSでかなりの情報通だから。彼ならもっと詳しく教えてくれるわよ。」

「はい、分かりました。」

「いい返事ね、宮内くん。さて、話は変わるけど、これからSSで活動していくのに武器が必要よ。天使と戦ったり、時間稼ぎをしたりするときにね。そこで、

あなたに渡したいものがあるの。」

「なんですか？」

「これよ」

ゆりさんが出したのは、一丁の拳銃。

「これを僕に？」

「ええ。」

「これ、本物ですか？」

「気になるなら撃ってみなさい。」

僕は出された拳銃をしげしげと眺める。僕の記憶に間違いがなければ、この銃は、S & W P C M 9 4 5である。僕が初めて買ったガスガンが

このモデルだった。実銃では、45ACPを使いながら、380ACPほどまで反動を抑えたカスタムモデル。アメリカでもめつたに見られない

貴重なモデル。しかも、ステンレスシルバーだ。まんま僕が持っていたガスガンと同じである。

僕は拳銃を手にとると、マガジンを抜き、弾がチャンバーに入っていないか確認した。マガジンには、45ACPが8発、きれいに収まっていた。

マガジンを入れ、セーフティーを解除し、窓の外に銃を向ける。そして、スライドを引き、トリガーを引いた。

バン！乾いた音とともにもろにリコイルが来る。反動を抑えているとはいえ、銃が上に跳ね上がった。

「うお！」僕はその声を漏らした。そして、誰もいないグラウンドに着弾し、土煙が上がった。僕はそのまま8発を撃ちきった。

見事にスライドストップがかかり僕は銃をおろした。

「どう？」

「……。」あまりの凄さに言葉が出なかった。まさか、こいつをまた持つことができるなんて……。

「いい？今日からはこれを携帯すること。あと、天使に出くわしたら、助けを呼ぶか、余裕が出てきたら、戦闘に参加すること。これだけ守ってもらえれば、後は好きに行動していいわ。」

「分かりました。」

「じゃあ、次の集合は、明日の午後6時。場所はこの校長室だからいいわね？」

僕は無言でうなづく。

「以上。」

僕はその言葉を聞いてから、扉の外に出た。

「食堂前エントランス」

「ふう……。。」僕は自動販売機でROOTSの微糖を買い、ゆっ

くりと飲んでいた。なぜかこの自動販売機は、生前の世界の飲み物と同じ物があつた。ちなみにお金は、事務課でもらったもの。

「死後の世界か……。。」いまいち、僕には理解ができなかった。

でも、死んだという認識はある。でも、こういう死後の世界も

悪くないな。特に、本物の銃を持つことができるなんて、夢にも思わなかったからだ。

「さてと、行きますか。」僕はいったん寮に戻ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3168n/>

AngelBeats!Pararell?

2011年10月7日12時35分発行